

2022 年 9 月 30 日発行 特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部

「アクション・チェルノブイリープフライムト」(ドイツ)からのメッセージ

「アクション・チェルノブイリープフライムト」代表 Dr.ヨーゼフ・ツィーグラー

ロシア軍のウクライナ侵略戦争は 2 月 24 日からすでに 6 か月以上が経ち、ウクライナの市民の犠牲者は増え、各都市、町や村が破壊され続けており、多くの人々が心を痛め、願いも届かず未だ戦火が止む気配もありません。 私たちは 3 月からウクライナの緊急支援を開始してきましたが、ドイツの NGO「アクション・チェルノブイリープフライムト」の大きなご協力があって実現しています。同団体の代表者で医師であるヨーゼフ・ツィーグラー氏に、団体の活動紹介と、私たちとの緊密な連携によって実現した救援活動についてご報告を頂きました。

私たち「登録社団アクション・チェルノブイリープフライムト」は、1991年から、主にウクライナの人々への人道支援を行っています。メンバーは皆ボランティアで仕事をしており、私たちのプロジェクトの財政基盤は会社や団体、学校、幼稚園、個人からの寄附で成り立っています。

30年以上にわたる私たちの人道支援は、常に医療の改善を中心として行われてきました。一方では、チェルノブイリ原発事故で被災した子どもたちの 6 回に及ぶ保養受け入れを通じて、他方では、あまり支援を受けていない地方の病院の設備の改善を通じてでした。自力で運営した 24 回の大きな貨物運送と、17 回の業者のセミトレーラー・トラックによる輸送で、数百万ユーロの貴重な、一部はハイテクノロジーの医療機器と器



アクションチェルノブイリのメンバー。右端ツィーグラー氏

具をパートナーの病院に届けることができました。定期的な訪問による点検、修理、予備部品の配送、医療スタッフの教習などで、支援物資の適切な利用が保証されました。またコロナウイルスのパンデミックに際し、緊急に必要な医療物資の購入を通じて、パートナーである病院への支援を継続することができました。また、私たちは、ウクライナの会社から物資を配送させ、ドイツから支払いをする支援方法を確立させました。

ウクライナのパートナーたちとの継続的なコンタクトを通じて、私たちは、過去の大きなプロジェクト《ナロジチ病院小児科及び小児感染症セクションの改修を始め、キーウの神経外科病院消毒設備の購入・稼働、ヤホティン市[訳注:キーウ州ボルィスピリ地区]の病院の近代的な消毒設備設置、ヤホティン市・ナロジチ町・ブラホヴィシェンシケ市[訳注:キロヴォフラード州ホロヴァニウシク地区]の病院の多くの救急車の購入・装備・配送》が、町の人々の健康のために意義深い役割を果していることを知っています。コロナウイルスによるパンデミックの現段階で、私たちはこれらの病院に、感染した患者の救命措置を保障する非常用発電装置の資金を提供することができました。さらに、私たちはいくつかの救急医療機器をナロジチ病院に提供し、それらは数日中に稼働されました。

2022年2月24日の、ロシアによる侵略戦争の開始は、 私たちの人道的な任務の妨げにはならず、むしろ強化しました。ドイツの人々の進んで寄附しようという意欲は一気に高まり、さらなる支援行動を可能にしてくれました。 長年の間に成長してきた、信頼できるネットワークを私たちは活用したいと思っています。私たちの努力は、チェルノブイリ原発の西方、ナロジチ、ジトーミル、オヴルチといった町に集中しています。

ジトーミルで活動している慈善団体「チェルノブイリの人質たち」との多年にわたる共同作業を通じて、私たちの団体と、この地域でやはり 90 年代初めから人道支援を行っている日本の「チェルノブイリ救援・中部」、そして「世界の子どもたちのために(CheFuKo 基金)」、「広島文化学園大学ウクライナ子ども支援実行委員会」との接点が生じました。日本の団体には支援物資をウクライナに持ち込むことができないので、物資の調達とそのポーランド

国境のプシェムィシルまでの輸送を、私たちの団体が引き受けました。物資はそこでジトーミルの消防局の職員たちに引き渡され、目的地まで運ばれました。 2022 年3月から8月まで、こうして支援の貨物がジトーミル州に届けられました。

貨物は、医薬品、注射器、点滴セット、縫合用品、手 術衣と手袋、包帯、おむつ、粉末洗剤、粉ミルク、救急 用品、ビリルビンメーター、パルスオキシメーター、血圧 計、ノートパソコン、消防用備品、赤外線カメラです。こ れらは受取先に確実に届けられ、医薬品やおむつ、粉ミ ルクも配布されました。

私たちは日本からの大規模な支援に、そしてドイツに おいても寄附の気運が非常に高まったことに感謝してい ます。ロシアの侵略戦争の犠牲者たちへの支援という共 通の目的が、国境と大陸を越えて達成されたことをうれし く思っています。

発送の日付	輸送物資の価格総額	日本の団体の寄附	私たちの団体の分担分
2022. 03. 25	40, 002. 03	(救援・中部) 38,045.96	1, 956. 07
2022. 04. 22	35, 000. 00	(CheFuKo 基金) 14,748.77	20, 251. 23
2022. 06. 01	72, 892. 06	(救援·中部) 20,100,00	48, 597. 31
		(救援·中部) 4,194.75	
2022. 08. 20	18, 954. 03	(救援·中部) 2,000.00	2, 666. 55
		(広島文化学園大学) 14,287.48	

(*通貨はすべてユーロ)



ドイツ・プフライムト→チェコ・プラハ→ポーランド・プシェムィシル→ ウクライナ国境→ジトーミル 距離 1500 kmを車でリレー





ジトーミル州立小児病院

キーウを逃れて

イリーナ・ペトリチェンコ

皆様こんにちは、イリーナでございます。 『ポレーシエ』 190号の続きを述べさせて頂き ます。

3月14日の昼ごろキーウ市を出て、21日の夕方には羽田空港に着きました。キーウと名古屋、東京しか住んだことがない私は「避難するなら日本」と決めて最初から日本を目指していました。かと言って、前回の留学や訪日研究と大きく違うのは、日本で「すること」や「住む場所」が確定していません。「3月は新学年の前なのでアカデミック界としては有利だろう」という漠然としたアイディアと、さいたま市の友人がメールで書いた「ウチは一部屋が空いているので日本に来れば泊まっていいよ」という言葉を頼りに、無数の親切なウクライナ人やポーランド人、経由したロンドン空港の職員までの助けを借りながら日本に到着したワケです。さいたま市の友人も空港ま

で迎えに来てくれて、7日間のコロナ隔離を彼女宅で過すこととなりました。

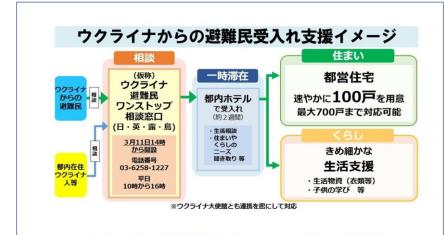
ウクライナ避難者に発 給される「短期滞在」のビ ザは日本国内で収入を得る



ことが禁止されているので、「隔離が終わったら 真っ先に出入国在留管理局で在留資格の変更だ」 と、到着後すぐに決めて実施したのですが、それ 以外の「職探し」や「住宅探し」で悩みに悩みま した。最初に確保したのは「住宅」なので今回は その話をいたします。

マンスリーマンション等のウクライナ避難者 支援も検討していましたが、たいていは3ヶ月間 だけでしたので、東京都が1年間だと知ったとき 迷わず都営住宅(図ー上参照)にして「正解だっ た」と思います。なぜなら、第一に、都の横断的プ

> ロジェクトなので、ことがスムーズに 様々な部署から部署へと流れて行き、 地元の受入れ自治体での転入手続き 等のサポートも付いてきます。第二に、 住宅待ちの避難者が都内1ヶ所のホ テル、しかも同じフロアに住まわせて いるので、自然にウクライナ人コミュ ニティや助け合いが生まれてきます。 第三に、次々と追加の支援が考え出さ れ、現在は wi-fi の無償提供や光熱費 の都負担などもあり複雑な図表にな りました(図一下参照)。第四に、蓋 を開けて分かったのですが、自分が選 んだ三鷹市は、都から「あつい」と言 われるほど避難者受け入れに熱心で、 市の国際交流協会等が手厚くサポー トしています。第五は嬉しいサプライ ズで、都のウクライナ避難者リストに は私とかの名前横に「日本語が分かる」 みたいな印が付けてあるようで、担当 部署から「お願い」(バイト等)が来た りしますが、その詳細を次号でご紹介 します。



ウクライナから避難された方々への都の支援策



新規 … 令和 4 年度 6 月補正予算新規事業

※ウクライナ避難民に対する支援は、ウクライナ避難民支援チームで実施

(続く)

「何があろうと、新しい命の誕生を助けます」~ナターリヤ・A・ポリャンシカ~

戦争の最初の日々から、マルイン市立病院産婦人科のスタッフは、火薬庫のただ中にいるかのような状況に置かれていた。敵の砲撃は続き、一方同科には緊急の措置を施さなければならない産婦たちが運ばれてきた。医師や看護師たちの中には、母親たちや新生児たちと共に泊まり込んだ者たちもいた。疲れ果て、しかし自らの容易でない仕事の結果に満足した同科の職員たち30人近くは、この世に生まれ出てくる子どもたちへの力添えを続けている。さらに、この激動の日々、マルイン市(ジトーミル州)は隣接するキーウ州の赤ん坊たちにとっても、生まれ故郷となったのだった。産婦人科のスタッフの仕事、心労、喜びの涙について、同科の主任医師、熟練した専門家であるナターリヤ・A・ポリャ

ンシカ氏にお話を伺った。 (『ジトーミル州』紙転載 2022 年 7 月 8 日 インタヴュー:ボフダン・リソウシクィイ)



--ナターリヤ・アナトー リイウナ、ご体験につい て思い出していただけ ませんか?

--この災厄が始まった 時、私は自宅にいました。 戦争の開始について夫 が知らせてくれ、すでに 朝 7 時にはセクションに

入りました。最初はスタッフ、産婦、患者たちのことを非常に心配しました。私は臍を固め、腹を据えて、その気分を職員に伝えました。神経質になり、恐れをなしている女性たちが私たちを見ているのですから。私はたぶん、一生の間でこれまでこんな感情を体験したことはなかったでしょう……。

ロシア軍がマルインの中心部を砲撃したその夜、私たちは手術室にいました。緊急に手術を行わなければなりませんでした。その後、出血の激しい女性がいたのですが、その時再び空襲警報が鳴り、どこか近くで激しい爆発音が響きました……。なぜだかわかりませんが、この二つの最も困難なケースが、まさにマルインとその周辺の砲撃と重なったんです。でも私たちは覚悟を決め、耐え抜いて、私たちの患者の生命を救うために必要なすべてのことを行いました。

マルインが砲撃された時、子どもたちが生まれ、職員の女性たちは地下で母親たちと夜を過ごしました。出産の 70%は、戦争の最初の2週間に行われました。

分娩室を、病院の地下のスペースに移すことに決めました。出産や患者の検査を行うために必要

な医療機器や設備を、私たちはそこに運びました。特に、 分娩を行い、産婦に手助けをするための特殊な可動ベッドを設置しました。その後さらに、より大きな一室を設け ました。そこに、母親たちと医療スタッフのために15床のベッドをしつらえました。

---最初の日からあなたのそばにいたのは誰ですか?

一一患者たちが常に専門的なコンサルテーションやアドヴァイスを受けられるように、仕事の段取りを組みました。私自身は、1 日おきにセクションの宿直を担当しました。自宅に戻ったのは4月11日です……。セクションには、産婦人科医が常駐していました。私と、同僚のレーシャ・G・ルデンコ、リュドムィラ・P・ホミネツです。もちろん、必要に応じて麻酔医も呼び出しました。勇敢に、そして誠実に、小児科医・新生児専門医のアンジェラ・C・ミクテリ、レーシャ・M・コマレーヴィチ、オクサーナ・O・スィチェウシカも働きました。インターンの医師たち、産婦人科医のアナスタスィヤ・S・イェニコ、小児科医のイルィナ・V・フリョルコも、効果的な助力を行いました。

数名の職員は、一時的に街を離れました。自分の子どもたちを安全な場所に避難させるためです。でも彼女らはもう戻ってきていて、今は仕事を続けています。スタッフは総員28名で、皆現在働いています。以前セクションで兼任でパートの仕事をしていた人たちまで戻ってきました。キーウから、あるいはマルインの私営のクリニックか



ら。同僚たちは皆、経験があり、連帯意識があり、それぞれの職種でプロの人たちです。そのことに私は非常に感謝しています。

――何か特別なケースはありましたか?

―マルイン自治体の母親たちだけでなく、激しい戦闘の 行われていたキーウ州からも、子どもを産むためにやっ てきた人たちがいました。

特別なケースといえば、2件がありました。最初は、ボロデャンキウ地区ザハリツィウ村の妊婦がやってきました。 砲撃を逃れてきたのです。まずヴォルゼリに行きましたが、そこではラシスト[訳注:「ロシア」と「ファシスト」の合成語] たちが産院を砲撃したので、さらにラドムィシリへ。でもそこには産科がありません。それで初めてこちらに連れてこられたのです。2日目に手術が行われました。生まれてきたボフダン君は元気でした。

もう一つの例は、イヴァンキウ近郊の 26 歳の若い母親です。マルィンに来る10日前、彼女は地下室で子どもを産みました。10日間、新生児とそこにいた後、ロシアの侵略者たちが「慰安」のために地元の女性たちを探しているという話を聞いて、妹と一緒に逃げました。赤ちゃんを連れた女性たちは、7km(!)を歩き、その後ヴォランティアたちがここへ連れてきました。母親は疲れ切り、びっこを引いていました。足が擦り切れていたのです。私たちは彼女を診察し、救急措置を行いました。今、母子は健康です。

一一戦時の条件下で、立ち合い出産は許可されていましたか?

--産婦に余計なストレスを与える状況は不要です。すべての子どもたちは月満ちて生まれ、体重も標準的で、その他の数字もしかるべきものでした。ストレスを最小限に抑えるため、戦争の初日から、立ち合い出産は許可されていました。そして、ここでの出産のうち、ほとんど90%が立ち合い出産でした。夫、母、姉、女性の友人など。

――必要なすべての物資、食品などの供給はどうでした か?

一医薬品で必要なものはすべて揃っています。新生児のための衛生用品はストックがあります。ヴォランティアたちが揃えてくれたものです。ユニセフから支給されたものもあります。医療用品、子ども服、少し大きな子どもたちのためのおまる、粉ミルク、緊急事態用の女性用品。私たちはまた、洗剤、消毒剤、幼児用マットも提供されまし

た。また、おむつや一部の小児用医薬品も渡すことができます。必要な機器や医療用品もあります。食品も、深刻な不足はありませんでした。最初は自分たちで食事を作り、ヴォランティアたちも手伝ってくれました。そして病院の食堂も常時営業しています。



― すでに、通常の営業に戻ってきておられるということですね。

--- ええ、もちろんです。人生は続いていくんです。4月 11日から、私たちは予定通りの婦人科の手術を行っています。

ちなみに、女性のためのコンサルテーションも続けています。外来でのコンサルテーションは、経験を積んだ産婦人科医のタマーラ・ムィコライーウナ・ハボルが行っています。

―この、私たち皆にとって容易ではない時、ご自分の患者さんと同僚に何を願われますか?

――子どもの誕生は、普段は喜びをもたらすものです。首に巻く最も貴重なアクセサリーは、あなたの子どもの腕です。そのことは絶対に忘れてはなりません。

同僚である産婦人科医、新生児専門医、助産師、看護師、准看護師たちに、彼らの献身的な仕事、プロフェッショナリズム、連帯意識、相互扶助に対して心から感謝します。私たち皆が頭上の平和な空、勝利、予定と夢の実現に恵まれますように。



今、ウクライナ・ジトーミル州では…

『開かれた心で』

「チェルノブイリの人質」基金 イェウヘーニヤ・ドンチェヴァ

戦争はもう4ヶ月以上続いていて、私たちはもうそれに慣れてきてしまっています。でも、戦時の新しい生活は、ジトーミル州が克服しようとしている新しい問題を私たちに提示しています。私の今日の話は、戦争が始まった



後ウクライナで生じた「国内難民」についてです。この人たちの生活、彼らへの国からの支援や、ここで例に引くジトーミル州の2つの地区の住民たちからの支援は、私たちの今日の現実なのです。

ベルドゥイチウ市は、ジトーミル市から 40 km南方にあります。公共の組織、ベルドゥイチウ市社会保障サーヴィスセンターは、700 人を管轄しています。主に年配の人たち、障碍者、一人暮らしの人たちです。社会保障サーヴィスとして、戸別訪問、金銭的支援、その他の支援を 500 人の人たちが受けています。戦争開始後、センター職員の仕事には、「国内移住者」、一般に「難民」と呼ばれる人たちの保護が加わりました。ベルドゥイチウ市内に 4,500 人の移住者がおり、1,200 人は子どもです。これらの人たちが必要としているのは、精神的な支えだけではありません。家を後に残してきた彼らは、ほとんどすべてのものを失っているのですから、どんな支援も喜んで受け入れます。市民たちは力を合わせて、これらの人たちの支援のためにいくつかのプロジェクトを実現させました。例えば、「ベルドゥイチウの長持」というプロジェクトに、多くの無関心ではいられない人たちが参加しました。少なからぬ量の物品が集められ、移住者たちに渡されて、彼らの役に立ちました(衣類、靴、衛生用品、寝具、食器)。これは戦争の最初の時期、非常に切実な問題でした。

ベルドゥイチウのもう一つの興味深いプロジェクトは、「統合支援」というもので、国内移住者を対象として働く機動班の設立に関するものでした。この機動班が、地区内の村落部に派遣され、国内移住者の精神的な問題、衣料の問題、法的問題の解決に助力するのです。人々が助けを求めてやってくる社会保障の施設や人道問題本部で、専門家たちが直接移住者たちに対応します。

「両親のいない夏の空間」は、子どもたちを対象とするプロジェクトです。この地区には 1,200 人の子どもたちが移住してきていて、彼らには大人より問題が少ないというわけではありません……。ですから、プロジェクトの主な目的は、特に夏休みの間、子どもたちの余暇を充実したものにし、彼らを楽しませることです。そうすることで、子どもたちはより早く適応していきます。最初のこういった催しの一つは、「ベルドゥイチウの観光コース」という徒歩の遠足でした。子どもたちは町の歴史を知り、建築物や由緒のあ

る場所を見てお土産をもらい、寄附されたアイスクリームに舌鼓を打ちました。その他スポーツの試合、 絵画教室など、これらはすべて社会福祉関係職員たちの支援でした。また、国内移住者のうち年配 の人の中には、「活動的長寿クラブ」による、ノルディックウォーキングのクラスに参加を希望する人も多 くありました。



バラニウカ地 区 ゼレムリャ村 にて

バラニウカ自治体(ジトーミル州南部)は、私たちの日本の友人たちにはよく知られているところです。ジトーミル州の汚染地域からの住民が多く住居を提供された、バラニウカ地区ゼレムリャ村の准医師・助産師駐在所は、長年日本の皆さんのご支援を受けてきました。戦争の最初の日々、この地区はブチャ、イルピニ、キーウやジトーミル州内からの最初の難民たちを受け入れ、のちにはウクライナ東部からの難民を受け入れました。チェルニヒウ州からや

ってきたいくつかの家族もありました。移住してきた人たちの登録がただちに開始され、これらの人たちは国内移住者の資格を認定され、13の村で学校、個人の住宅、その他の空いているスペースに住み始めました。当初、バラニウカ自治体に3,500人が移住しましたが、その全員が住みついたわけではなく、多くはすでにヨーロッパ諸国に移動し、また自宅に戻っていった人もありました。難民たちの移住は続いており、今バラニウカには1,700人近くの国内移住者が住んでいます。自治体には彼らを養うだけの物資がありますが、他にもポーランドの姉妹都市であるウクフとトゥフフ、またリトアニアやエストニアの町からも大きな人道支援を受けています。人道支援本部が設立され、日々活動しており、多くの衣類、医薬品、食品を受け取っています。多くの地元住民は、自宅に移住者たちを受け入れたいという希望を表明しました。もちろん、多くの移住者たちはこの自治体に住む親戚を頼ってやって来ています。ここに長期滞在したいという人もいますが、大多数は戦争によって住み慣れた所を追われて一時的に移住した人たちです。国内移住者の資格を得た人は、しかるべき医療を受ける権利があります。そして9月1日から、移住者の子どもたちは、自治体の子どもたちと同じように学校に通います。

私は、これら 2 つの地区の難民たちの生活について詳しくお知らせしようとしました。でも、ジトーミル州のかつての 23 の地区[訳注:2014年改編され、現在ではジトーミル地区・ベルドゥイチウ地区・コロステン地区・ノヴォフラード・ヴォルィンシク地区の 4 地区]すべてが、戦争の最初の日々から難民を受け入れており、彼らの多くは未だに私たちの州に住み続けています。そして戦争はまだ終わっていません。あらゆることが起こる可能性があります。しかし大事なことは、人々がどのような事態の進展に対しても用意ができているということなのです。

愛知淑徳大学・CCC(コミュニティ・コラボレーション・センター) 「なごやであそび隊」が 街頭募金に取り組みました!

ロシアとウクライナのニュースが流れたのが 2022 年 2 月 24 日。あれから、毎日のように情報が報道されます。 半年以上、経ってしまいました。「私たちには、何ができるのか?」

CCC では、10 年以上、チェルノブイリ救援・中部とかかわりを持たせていただいてきました。チェルノブイリの子どもたちにクリスマスカードを届ける事業に、学生たちがたくさん参加させていただいてきました。東日本大震災の後は、福島の子どもたちへもクリスマスカードをお預けして、届けていただいてきました。そんな中で、ウクライナの皆さんへの物資支援や寄付の案内が届きました。「私たちがすぐに動ける、向こう側の姿が見える活動だね」と、学生団体「なごやであそび隊」の学生たちと話し合い、毎月の募金活動を始めました。

初回は、7月17日、名古屋市栄で7人の学生がおこないました。道行く方々に「ウクライナの子どもたちに募金をお願いします」と絶えず声をかけながら。この日は、



19,403 円が集まりました。ここから、毎月 1 回、栄での募金活動をおこなっていく予定です。

<参加した学生の声>「ウクライナのみなさん・子どもたちの力に少しでもなれたら」という思いで、今回募金活動に参加しました。初めての募金活動で緊張しましたが、積極的に声掛けを行うことでたくさんの方に募金をして頂きました。今後も募金活動を続けて、少しでも早く安心して生活できる日が来ることを願っています」(グレープ)

どうか、少しでも早く、ウクライナの子どもたちが安心して過ごせる日がきますように。

(CCC 秋田有加里)

南相馬からの意見、思い

2022年6月11日のチェルノブイリ救援・中部の総会に出席できない事、申し訳ありません。 この11年間、福島支援をして頂いた会員、支援者の皆様にあらためて、感謝申し上げます。

震災による福島原発事故の放射能被害から立ち上がる為に、助言と資金を出して頂きました。お陰様で、自 分達の足で立つ事が出来、ウクライナの被災者との交流が出来るようになりました。友達として、福島から今、 困難の中にいるウクライナの人々に、私たちが出来ることで、助け合えたらと思ってます。

さて、皆様が南相馬農地再生協議会の状況は、どうなっているのかと疑問に思っていると思います。皆様からの支援金は、どう使われたのか?これからの農地再生協議会の向かうところはどうなっているのかと。

南相馬市信田沢の菜種油の搾油所の撤去と市への返還が、3月いっぱいで、終了しました。ここまで来るのに2年近くかかりました。農地再生協議会の実態調査と解明が必要との思いで、毎月の定例会で議論され、協議されて来ました。

1番の問題点は、事務局と代表からの情報が示されてこなかった事で、何が問題なのか知らされてこなかった事だと思っています。

まだ、農地再生協議会の未来は決まっておりませんが、菜種油の生産を、南相馬で継続する為に、思いのある人達で新会社を立ち上げ、思い描いていた、農地再生と循環型の農業と集う場所、安定した雇用と持続性のある事業を目指して、再出発を致します。今、その為に準備しております。

会員の皆様の温かい支援と見守りをお願い申し上げます。

2022年6月10日 南相馬市小高区 双葉屋旅館 小林 友子

ザポリージャ原 発 の今 ----原発が戦争の道具に----

ロシアによるウクライナ侵攻が始まってから半年経った今も戦況は変わらず、何時終わるか見通 しもつかない。そうした中、ウクライナ南部のザポリージャ原発が大きな危機に立たされている。原発 が戦争の道具として利用され、成り行きによっては攻撃対象となればチェルノブイリをはるかにしのぐ 重大事故につながる恐れが現実のものとなっているのだ。

ザポリージャ原発とは

ウクライナ南部のザポリージャ州エネルホダルという地区にある加圧水型原発 100 万Kw、6基からなり、ウクライナ中央部を流れるドニエプル河の左岸にある。1~5号機はソ連時代の1985から1989年にかけて作られ、6基目は独立したウクライナ国が1995年に作った。ウクライナの全電力の約20%を賄い、ウクライナは勿論ヨーロッパで最大規模の原発である。

攻撃対象になったザポリージャ原発

戦争が始まった直後の3月4日深夜、ロシア 軍はザポリージャ原発に爆弾を投下し、この日 から原発はロシア軍の管理下に置かれた。ウク ライナ人の運転員たちは厳しい監視下に置か れ、1人はウクライナ側に情報を流した疑いが あるとして射殺された。爆弾は職員の研修施設 に当たり炎上した。もし原子炉や原発の管理施 設に当たれば重大な事故をもたらした可能性が ある。単純計算だが、もし6基が爆発炎上すれ ば広島原爆 5000 発に相当する放射性セシウム が放出・拡散されたであろう。ウクライナはも とより、ロシアもヨーロッパ、更には地球規模 の放射能汚染が起こったかもしれない。こうし た危険性は当然、誰もが想定出来ることで、世 界的な関心を呼ぶようになった。3月4日の爆 弾投下についてもロシアは自らの責任を否定 し、ウクライナ軍の芝居だと主張したが、誰が 信用するだろうか。

原発を軍事基地にしたロシア

現在、ロシア軍はザポリージャ原発を軍事基 地化し、戦車や装甲車、移動式ミサイル発射装 置などを運びこみ、原発周辺に地雷を設置して ウクライナ軍の侵入を阻止して、ここからドニ エプル河対岸のウクライナ領に爆撃を行ってい る。ウクライナ側がここを爆撃できない事を利 用しているのだ。

相次ぐ爆撃と大事故のリスク

にも拘らず、ザポリージャ原発周辺には絶えず爆撃が行なわれ、ロシアとウクライナ双方はお互いに相手に責任を擦り付けている。爆撃により原発の送電線4本のうち3本が切断され、辛うじて1本だけが機能していたが、8月25日に最後の1本も切断され、原発の全電源が失われた。ウクライナへの電力を遮断し、ロシアが支配するクリミア半島に電気を送る意図があるようだが、万が一ポンプが停止し冷却機能が失われればチェルノブイリを凌ぐ大事故につながる。幸い、ジーゼル発電機による緊急電源が作動し、辛うじて1本の送電線が復旧された。こうした危機的な事態にもロシアとウクライナ双方が爆撃は相手だと主張している。

IAEAの調査

9月1日、国際原子力機関(IAEA)の専門家らがザポリージャ原発に入った。これはウクライナ・ロシア双方の提案による。IAEAは専門家2名を常駐させる意向だが、ロシアは反対している。ウクライナは原発周辺を非軍事地帯にするよう求めているが、ロシアはこれも反対している。今後も行方を注視する。

(2022年9月4日 河田)

【寄付・会員状況のお知らせ】

◆7月 寄付/会費 738,265円 ◆8月 寄付/会費 297,000円

◆2022 年度累計(ウクライナ救援基金を除く)

2,918,642 円 (8 月末)

◆ウクライナ救援基金 16,039,403 円

 $(2022/3/7 \sim 2022/8/31)$

◆会員数 186 名(正会員 48/賛助会員 136)

◆ポレーシェ読者数 634 名

~心温まるご支援をありがとうございました~

【寄付のお願い】

- ◆一般寄付 三菱UFJ 銀行 高畑支店 普通 1682863
- ◆ウクライナ救援基金三菱UFJ銀行名古屋営業部 普通6949211
- ◆郵便振替 00880-7-108610

〈口座名義〉

特定非営利活動法人チェルノブイリ救援中部

◆クレジットカードでも受け付けております (ページ下の QR コードから寄付ページへアクセス!)

※領収書が必要な方はご連絡ください

事務局だより

「クリスマスカード·キャンペーン」 ~戦禍のウクライナの子どもたちを 励ましましょう!~

今年のクリスマスカード・キャンペーンは、例年の取り組み と異なる意味合いを持つことになりました。これまでは、子ども たちは自分の家族や学校でクリスマスを楽しみにし、日本から のカードで遠い"日出ずる国日本"を想像してみるという平和が ありました。今ウクライナの子どもたちは、爆撃にさらされ、心身と もに傷ついています。今こそ、ウクライナの子どもたちを励まし、癒 す心の支援として、カードを送りたいと思います。



これまでのように、ウクライナの病院や学校の子どもたちに「ホステージ基金」によって手渡してもらえます。また、ウクライナでも、日本の福島の子どもたちへのカード作りに、できるだけ参加してもらえるよう呼びかけるそうです。カード作りを通して、心のケアが図られるとのことです。

毎年、10月22日に開催されるイベント、ワールドコラボフェスタ2022(名古屋市中区・オアシス21)で、カード作りのワークショップを行います。またご家族単位で、学生たちのグループで、学童保育所等でも取り組んでいただいていますが、ぜひ多くの皆様の心のこもったカードをお待ちしています。今年は他に、ウクライナから避難されている方々にも、ご一緒にカード作りに参加していただきます。

募集要項は次の通りです。ウクライナへのカードの締め切り日は11月18日(金)、また同時に福島の子どもたち向けには11月25日(金)が締め切りです。カードはチェル救事務所までお送りください。(戸村京子)



発行 特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部

〒460-0012 名古屋市中区千代田 5 丁目 11-33 ST PLAZA TSURUMAI 本館 5B TEL&FAX 052-228-6813(月·水·金 10:00 ~ 15:00)

E-mail chqchubu@muc.biglobe.ne.jp URL http://www.chernobyl-chubu-jp.org

印刷 エープリント 名古屋市熱田区波寄町 20-14 TEL&FAX052-871-9473

